

第3章 まとめ

1) 長崎県の古墳

3年度にわたって実施した前方後円墳の測量図と、現在までに報告されている前方後円墳の図を第40図に示している。いずれも1/1,000の縮尺で統一している。図に示したのは、対馬3古墳、壱岐7古墳、本土部の4古墳の計14古墳で、長崎県内の前方後円墳の半分強である。

長崎県内での前方後円墳としては、対馬に4箇所が知られ、壱岐の13箇所とあわせて、中央政権と朝鮮半島を結ぶ、大きな交通路であったことを表している。この大きな交通路から西にそれ、北松浦半島の先端近く達したものもある。在地系の勢力によって築かれたと考えられる笠松天神社古墳であり、海上交易によって力を養ってきたと思われる岳崎古墳がそれである。

一方、中央政権の支配権が佐賀平野から西に向かった状況も考えられる。そのひとつは、佐賀平野の西端に達したあと、大村湾東岸にいたっている。東彼杵町のひさご塚古墳などがそれであろう。佐賀平野から南に、あるいは海上から、前方後円墳の制度が南高来郡にも達している。吾妻町の守山大塚古墳がそれであろう。

墳丘の規模についてみると、双六古墳が全長89.5mで、長崎県では最長の前方後円墳ということになる。守山大塚古墳の現在の長さは66mであるが、前方部の削平のため往時の規模については不明といわざるを得ない。しかし、後円部の直径は45mあり、これに見合う前方部を付けた場合、90m前後の大きさが考えられる。第1表に示したように、30mから80mまでの大きさのものが10基あり、10m級のものと20m級のものも10基で、小形の前方後円墳が多いのが明瞭であろう。50m級以上のものは、県内にはわずか5基にしか過ぎない。そのうち2基は壱岐にあり、鬼の窟（矢櫃）古墳や笹塚古墳などの堂々たる円墳も知られている。5世紀後半まで、大規模な古墳の出現は壱岐では知られておらず、爆発的に古墳が増えたのは、6世紀のなかばから『日本書紀』に急増する朝鮮半島関係の記事も、その背景のひとつと考えられる。

以下、6世紀から7世紀ころまでの状況についてみておきたい。

2) 6世紀から7世紀における日本と朝鮮半島の状況

6世紀から7世紀における日本と朝鮮半島の関係について、『日本書紀』についてはかなりの記述が認められる。半島南部での日本の利権や、新羅の進出にかなりの神経を使っていいる状況が窺える。繼体21年、近江毛野臣が率いる6万の兵を阻み、筑紫国造磐井が反乱を起こした。磐井は九州北部にあって、密かに新羅と結んだことであるが、反乱を計画して年が経っていたとのことで、一応中央の政権の支配下に位置づけられているとはいえ、何らかの不満を抱いていたものであろう。

6世紀末から7世紀初頭においても新羅に対しての対立が目立ち、万を越える軍隊を派遣した記事がたびたび残されている。7世紀初頭、『日本書紀』推古10年条によれば、来自皇子が



第40図 長崎県内の前方後円墳 (1/1,000)

第1表 長崎県の前方後円墳・調査古墳一覧表

番号	名 称	所 在 地	全長 (m)	前 方 部 (m)			後円部(m)			くびれ部 の向き	調査年	標 高 (m)	備 考	
				長さ	幅	高さ	直径	高さ	幅					
1	双六古墳	壱岐郡勝本町立石東触	89.5	50	38	4	39	9.7	14	2.5	北北西	平成2	102	横穴式石室 基壇上に築造 細長い前方部
2	守山大塚古墳	南高来郡吾妻町本村名大塚	66	以上	15	2.5	45	7.2			西	平成2	15	前方部かなり削平 現在墓地として使用
3	ひさご塚古墳	東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷	58.8	21.1	18.5	2.6	37.7	6.3	11		西北西	平成2	2.2	前方部かなり削平 荘石
4	対馬塚古墳	壱岐郡勝本町立石東触	65	35	25	3.5	30	7		2	北	平成3	103	横穴式石室 細長い前方部
5	岳崎古墳	北松浦郡田平町岳崎免	56	24	25	2	32	6			東	平成3	21	
6	出居塚古墳	下県郡美津島町大字雞知	40	21	4	1.2	19	3.7			北北東	平成3	53	前方後方墳 横穴式石室
7	観上山古墳第1号墳	壱岐郡芦辺町本村触	29	15	14	3.5	12	3.5	8		北北東	平成2	85	横穴式石室
8	笠松天神社古墳	北松浦郡田平町小手田免	34	以上	14	1.4	22	2.5	9.6		北西	昭和63	34	横穴式石室か箱式石棺 荘石
9	根曾古墳群2号墳	下県郡美津島町大字雞知	36	17	9	1.5	19	3.5			東	昭和23	20	
10	百合畠古墳群第1号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	26.5	以上		1.6	20	4.7			西北西	平成2	108	北側1/3ほど削平
11	根曾古墳群1号墳	下県郡美津島町大字雞知	30	12.3	5.5	1	14.5	5	5		南南東	昭和23	30	
12	大原天神の森1号墳	壱岐郡郷ノ浦町志原大原触	27	13	7.5	2	14	4	7	1.5	西	平成元	31	
13	大原天神の森2号墳	壱岐郡郷ノ浦町志原大原触	24	12			13	3.5	6	1.5	東南東	平成元	30	
14	百合畠古墳群第20号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	20	7.5	6		13.6	3.3	5.5		東	平成2	107	後円部一部削平
15	根曾古墳群4号墳	下県郡美津島町大字雞知	20									昭和23	10	
16	百合畠古墳群第3号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	18					3			東		110	
17	百合畠古墳群第14号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	20					2			東北東		96	横穴式石室
18	百合畠古墳群第15号墳	壱岐郡勝本町百合畠触	21					2			北東		96	横穴式石室 前方部にも横穴式石室
19	観上山古墳第2号墳	壱岐郡芦辺町本村触	20	以上				3					80	
20	山ノ神古墳群1号墳	壱岐郡芦辺町国分本村触					10	4					100	横穴式石室
21	妙泉寺古墳群2号墳	壱岐郡芦辺町中野郷東触	20					6.3			東		133	
22	石走古墳群1号墳	大村市矢上郷石走	30								西		10	横穴式石室
23	カサンガン古墳	東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷	25	12	19	1.5	15	2	11	1.5	南南東	平成2	2	現在墓地として使用
24	琴平神社古墳	大村市武部郷大園寺	20	10			10	2			東		50	
25	掛木古墳	壱岐郡勝本町百合畠触		円墳			30	6.8				平成元		横穴式石室 6世紀末～7世紀前半
26	笹塚古墳	壱岐郡勝本町百合畠触		円墳			66	12.5				平成元		横穴式石室 6世紀末～7世紀前半

將軍となって出陣している。来目皇子は現在の福岡県志摩郡まで進み、「聚船舶進軍糧」という段階に至りながら病に倒れ、翌年の春に筑紫で死亡している。このため兄の当摩皇子が征新羅將軍となり、難波から発船したとされている。

推古31年条にも数万の軍を渡海させ、征新羅軍を派遣している。そして、半島から完全に撤退するのは、663年に新羅と唐の連合軍に白村江において、壊滅的な打撃を受けて敗退した時点であろう。打撃がかなり大きかったであろうことは、翌664年の対馬・壱岐・筑紫に防人と烽を置き、筑紫に大きな堤を築いて水を貯えた、ということからも窺える。北部九州から、大和にいたる交通の要衝に朝鮮式の山城を築いていることから、朝鮮半島からの軍隊の進入の可能性を想定し、それに対する備えを目的としていることも明白である。

日本からの進入の目的については、日本が朝鮮半島の鉄資源について非常に強い関心をもっていたことを示す記事がある。^(註1) 大和政権は、また、金銀などの貴金属や綾、錦などのいわゆる財宝的なものについてはもちろん、人的資源ともいう各種の技術者を含めて、常に朝鮮半島からの補充を欲し、また実行していた状況が記述されている。

大和政権が朝鮮半島に進むルートとして、『日本書紀』にみられる地名としては、難波・大伯海・熟田津・穴門・娜大津・志摩・松浦・鰐浦など、大阪湾から播磨灘・燧灘・伊予灘・周防灘と、瀬戸内海を西に進んだ事が記されている。瀬戸内海を抜け、さらに西に進み娜大津に至る。来目皇子の征新羅軍の場合はここで船を集め、軍糧を運ぶ、とあり、九州北部一帯でのかなりの物資の調達が想像される。昔、乱をおこした磐井の恨むところの一因であったとも考えられる。志摩から松浦に至り、ここから壱岐・対馬に渡り、朝鮮半島南部に上陸したものと推測される。白村江での大敗のあと、直ちに対馬・壱岐・筑紫に防人を置き烽を設置したということや、順次に朝鮮式山城を築いていることは、このルートの存在を明白にしている。これらの通行路上に存在する地方豪族に対しては、一方では威圧があり、さらにもう一方では懐柔があって、硬軟両用、時に応じて対していたのであろうと想像されるが、筑紫の国造磐井についてはいかがであったろうか。『日本書紀』や『筑後風土記逸文』などには、天皇の命に従わず、強くて暴虐であると、とかく悪者にされているが、磐井にしてみれば、強大な権力によって服従を強いられ、そのあげく対朝鮮半島関係の悪化などによっては、人的・物的な提供を強要される状況に、我慢のできないところも多かったと考えられる。新羅と結び征新羅軍を阻み、中央政権に対して反乱をおこした事件のあと、磐井の息子葛子が糟屋の屯倉を献上して死罪を贖なった、旨の記載が『日本書紀』に認められる。当時としては、一族の長老の大罪に対して一族ともどもの追求があったことが想像されるが、父の大罪に対して屯倉の献上ということで連座を逃れようとした、ということが記してあることの裏には、可能性としてそれが許される状況があったのではないかとも思われる。中央の政権にとって、磐井の乱に対しては、かなりの手痛い思いがあったことを示す一端ではないかと推測される。

中央政権側の威圧から、懐柔への方針の変化とも考えられ、このことは、玄界灘に面した宮

地獄古墳や、壱岐の笹塚古墳出土の遺物のあり方にも結びつくのではないかと推測される。すなわち、宮地獄古墳出土の金銅製の馬具や、笹塚古墳出土の同じく金銅製の馬具類・畿内から持ち込まれたと思われる土師器など、すべて中央からの下賜あるいは提供品であったと考えられるからである。熊本県の江田船山古墳からは、銅鏡や銀象嵌大刀・衝角付冑・短甲・剣・槍などの武具、轡・鎧などの馬具、金銅製冠帽・垂飾付冠帽・垂飾付耳飾・金銅製沓などの装身具、須恵器・土師器などが出土している。これら遺物には、百济や伽耶地方の大陸文化と北部九州の文化、大和の文化が混在しているとの指摘があり、「当時の日本の政治的支配関係、対外関係をとき明かすのに重要な位置にある」とされている。^(註2) 大和政権の勢力が南九州へ伸びるために必要な場所であり、熊襲と呼ばれた人たちへの前線基地として使用するため、そこを治めている豪族に朝鮮半島系の品物を贈って懷柔したものと考えられる。江田船山古墳の被葬者の受けた扱いは、性格的には、宗像地方を治めた宮地獄古墳の被葬者や朝鮮半島への交通路、壱岐の笹塚古墳の被葬者と同様のものであったと推測される。

壱岐の古墳のうち、5世紀代のものとしては大塚山古墳が確認され、その近くの俵山古墳はまだ古かったと推測されている。このほかには5世紀代の古墳は知られていない。6世紀の後半に、島の中央部に大形の古墳が集中して築造される。矢櫃古墳・双六古墳・笹塚古墳・掛木古墳などであり、これらは壱岐の有力者の墳墓と考えられる。征新羅軍の司令官あるいは副官などの死亡について、壱岐に葬ったような記録はなく、やはりこれらの古墳は壱岐島の有力者の墳墓と考えるのが妥当であろう。しかし、壱岐の島のみの経済状況からみると、6世紀後半から7世紀前半のごく限られた期間に、これらの古墳を続けて造るのは、非常に困難ではなかったかと推測される。さらに古墳築造に動員される人間についても、一地方豪族とその血統の力のみで可能であったか、疑わしい点も残る。664年に、防人を置いたとされるが、6世紀においても対朝鮮半島関係はたびたび悪化した時もあり、そのような状況のもとで壱岐は兵站基地的に利用された可能性が考えられる。兵員や物資、また、それらを前線に送り出すための人員など、ある程度の集積がなされていた、と考えるのが普通ではなかろうか。以下、まったくの推測にしかすぎないが、平時におけるこのような人員を動員することにより、島内の経済に破綻をきたすことなく大きな古墳を造ることができたことの要因と考えておきたい。

中央政権側にしてみれば、古墳を築くことに人員を動員することで、壱岐の豪族の協力が得られれば失うものはさほどなく、得られるものが多いということは、今まで繰々と述べてきたことからも考えられることである。6世紀から7世紀にかけての壱岐と、それを取り巻く大和政権の対朝鮮半島政策について、推測を交えて述べてきた。要約すると次のようになろう。

- ・5世紀ころまでは、弥生時代以来の在地性の強い豪族が、それぞれの生産基盤に近い場所に古墳を築いていた。
- ・国家の後ろ盾を得た壱岐の豪族は、在地基盤より島の要衝で東西の港に近い国分地区周辺に移り、また、死後はそこに大きな古墳を残すことになった。

- ・朝鮮半島の技術者や鉄資源などを欲しがっている大和政権の、朝鮮半島への交通路に対馬とともに壱岐は位置していた。
- ・大和政権は、磐井の乱などを教訓に、海上交通を技とする宗像や、兵站基地としての壱岐の豪族に、半島系の豪華な馬具や畿内の土器などを贈って懷柔していた。
- ・壱岐はさほど大きな島ではないが、全長90mにちかい双六古墳、直径45mの矢櫃古墳、金銅製の豪華な馬具が副葬された笹塚古墳などが築かれたのは、以上のような情勢に無関係とはとうてい考えられない。

以下、推測として、対朝鮮半島との関係悪化に備えて、大和政権側の人員の常駐があり、壱岐の豪族の古墳の築造にあたって、それら人員の動員が許された可能性もある。駐留者のなかには築港の技術のある者や、堤を築くなど土木関係の技術をもった人物の存在も想像される。

壱岐中央部の古墳のなかで、明らかに同一の手法で設計したと考えられる笹塚古墳や双六古墳などがあり、墳丘や石室の設計者についてもいろいろ興味が引かれるところである。

いろいろな手抜かりや、準備不足、力量の不足によって、完全に意を尽くしているとは思いませんが、壱岐島内の古墳に限らず、今後いろいろな問題について、その本質に迫るための資料の一端としても、本報告書が活用されれば甚だ幸いだと思っています。

今回の、3年にわたる調査に、快くご協力をいただいた各古墳の土地所有者の皆様方や、関係各町の教育委員会教育長様ならびに職員の方々に、篤くお礼を申しあげます。 (藤田)

註1 『魏志』「東夷伝 倭人条」

註2 『江田船山古墳』熊本県文化財調査報告書第83集 熊本県教育委員会 1986

註3 『大塚山古墳』芦辺町文化財調査報告書第2集 芦辺町教育委員会 1987

参考文献

『長崎県史跡名勝天然記念物調査報告1』長崎県調査委員会 1926

『対馬島誌』対馬教育会 1928

『我が長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡及び遺物の概略について』

長崎談叢 第26輯 津田繁二 1940

『考古学から観た対馬』『対馬の自然と文化』駒井和愛 1950

『平戸町大久保免蜂久保古墳』『平戸学術調査報告』 京都大学平戸学術調査団 1951

『大島村の山浦河内免勝負田古墳』『平戸学術調査報告』 京都大学平戸学術調査団 1951

『対馬』東亜考古学会 水野清一外 1953

『長崎県上郡郡ディショウゴウ古墳』『日本考古学年報3』三木文雄 1955

『大將軍山古墳出土品』『埋蔵文化財要覧2』 文化財保護委員会 1959

『長崎県遺跡地名表 埋蔵文化財包蔵地一覧』長崎県文化財調査報告書第1集

長崎県教育委員会 1962

- 『古墳時代—九州—』「日本の考古学 古墳時代 上」小田富士雄 河出書房 1966
- 『九州考古学39・40』「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」小田富士雄 1970
- 『てぼ神古墳調査報告』佐世保市文化科学館文化財報告2 佐世保市文化科学館 1971
- 『曲崎古墳群調査報告書』長崎市教育委員会 1977
- 『長崎県埋蔵文化財調査集報 I』「小野古墳の調査」 長崎県教育委員会 1978
- 『杉山古墳調査報告書』吾妻町の文化財3 吾妻町教育委員会 1978
- 『柿ノ本古墳』瑞穂町文化財調査報告書第1集 瑞穂町教育委員会 1978
- 『美津島町誌』 美津島町 1978
- 『長崎県・黄金山古墳』「九州考古学研究古墳時代篇」学生社 小田富士雄 1979
- 『長崎県・高下古墳』「九州考古学研究古墳時代篇」学生社 小田富士雄 1979
- 『長崎県埋蔵文化財調査集報III』「ひさご塚古墳・鬼の穴古墳・野田古墳」
長崎県教育委員会 1980
- 『洲藻遺跡』美津島町文化財調査報告書第2集 美津島町教育委員会 1980
- 『対馬の歴史探訪』 永留久恵 1981
- 『対馬・壱岐の古墳』「探訪日本の古墳 西日本編」有斐閣 横山巳貴子 1981
- 『壱岐第15号』「壱岐島北部における古墳の現状」壱岐史跡顕彰会 松永泰彦 1981
- 『対馬・壱岐の古墳文化』「東アジア世界における日本古代史講座2」 小田富士雄 1984
- 『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第4集 小値賀町教育委員会 1984
- 『コフノ隣遺跡』「上対馬町文化財調査報告書第1集」 上対馬町教育委員会 1984
- 『古墳時代』「国見町郷土誌」 国見町 1984
- 『宮田古墳群』 外海町教育委員会 1985
- 『古田遺跡』「小佐々町文化財調査報告書第1集」 小佐々町教育委員会 1985
- 『町内遺跡分布調査・II』「小値賀町文化財調査報告書第6集」 小値賀町教育委員会 1986
- 『大塚山古墳』芦辺町文化財調査報告書第2集 芦辺町教育委員会 1987
- 『カジヤバ古墳』芦辺町文化財調査報告書第3集 芦辺町教育委員会 1988
- 『小嶋古墳群』松浦市文化財調査報告書第4集 松浦市教育委員会 1988
- 『小佐古石棺墓群』「大村市文化財調査報告書第13集」 大村市教育委員会 1988
- 『笠松天神社古墳』田平町文化財調査報告書第4集 田平町教育委員会 1989
- 『野田古墳』「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI」
長崎県教育委員会 1989
- 『鬼の窟古墳』「芦辺町文化財調査報告書第4集」 芦辺町教育委員会 1990
- 『ひさご塚古墳』「東彼杵町文化財調査報告書第5集」 東彼杵町教育委員会 1991
- 『前島古墳群』「時津町埋蔵文化財調査報告書第1集」 時津町教育委員会 1991